

# 田中ORT(視能訓練士)のちょっといい話

## 見えるってどういうこと?～視覚のはたらき

### 第7回(全10回). 視野のはなし(1) 盲点がなければ見えません!

『盲点』という言葉を知っていますか? 「いや～、それは盲点だったなあ～」と言ってポリポリと頭を掻く、という情景が浮かんでくるかもしれませんね。うっかりして気づかず見落としていること、という意味で広く使われていますが、元になっているのは視覚に関する医学用語です。

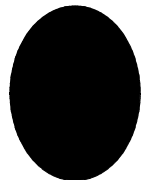
目に入った視覚情報は網膜で受け取られ、神経線維の束になって1か所に集まり、視神経として眼球を出て脳へと伝達されます。眼球の出口の部分(視神経乳頭しんけいにゅうとうと言います。)には網膜がないため、そこに映ったものは見えません。その見えない部分を、発見者の名前から『マリオット盲点』と言います。視覚情報を脳に伝えて『見る』ために絶対に必要な視神経の存在のために『見えない部分(盲点)』がある、というのは、なんだかジレンマを感じますね。

#### 実験1. 盲点は意外と大きい!

左目を隠して、腕を伸ばした距離にこの紙を置き、右目で下の×印に注目してください。●が視野の右側に見えていますね。視線を×印に固定したままで少しずつ紙に近づいてみましょう。

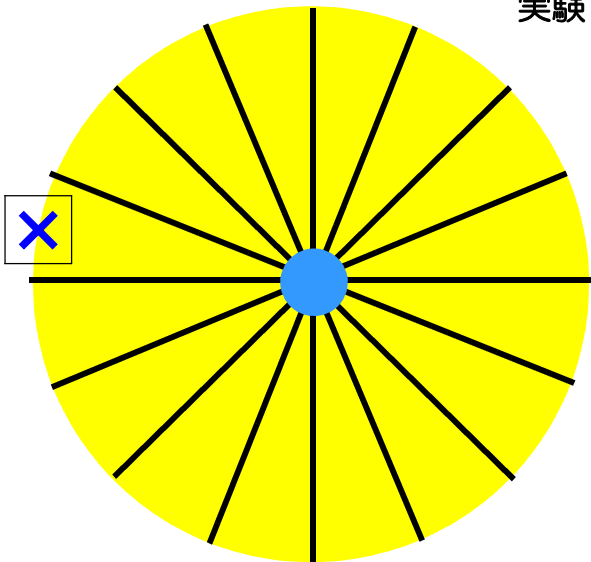


あるところまで近づくと●が消えて白く抜けて見えます。このとき●が盲点にすっぽり入ったのです。こんな大きなものが見えていないなんて、驚きますよね。20m離れば大人一人がすっぽり入ってしまうほど大きな盲点ですが、目は絶えず動いていますし、左右の目で補い合うため、普段意識されることはありません。



#### 実験2. 盲点は何色?

左目を隠して、15cmくらいの距離にこの紙を置き、右目で左端の×印に注目します。視線を×印に固定したままで少しずつ紙に近づいてみましょう。



今度はどうでしょう。円の中心が盲点に入った時、そこは白でも暗黒でもなく、黄色に見え、しかも実際には描かれていない、交わる線まで見えてきませんか?

これは目の能力ではなく、脳の仕業です。脳が「中心の情報はないけど、周りの様子からするときっとこんな感じだろう」と状況判断(?)をして、映像を創作して私たちに見せているのです。

脳が勝手に(?)映像を創作するのは、盲点部分だけではありません。視野の一部が見えなくなったり狭くなったりした場合にも、脳はあたかも『ちゃんと見えている』ような印象を作り出します。これは便利な機能のように思えますが、実際には視覚情報が入っていないのに見えていると感じるのは“気のせい”で、その思い違いが視野の異常を自覚できない大きな原因となり、様々な目の病気の発見を遅れさせてしまう、困った機能でもあります。

次回は、いろいろな視野障害のお話をします。